創立 80 周年記念誌より **〈演劇部創立と初のコンクール受賞〉**

昭和 24 年卒業生　映画監督　千野皓司　様

小学校 5 年生の時、町内会の会長が書いた芝居の脚本の主役を、料理屋の大座敷の舞台で演じて以来、私は演劇に興味を抱き短編の戯曲を書いていた。終戦後、疎開先から戻って芝商に復学、私は数人の仲間とともに演劇部を創立した。その時相談したのが、江口寿男先生で、戦前から俳優は「河原乞食」と言われていたから、先生は「学生がなぜ芝居なんかやるのか」という非難があったそうで、江口先生はこれらの批判を説得するのに苦労したそうである。

1946（昭和 21）年 11 月 3 日、第一回公演として山本有三作「盲目の弟」を学校の講堂で上演した。演出は長坂慎一郎、兄準吉役は芳賀光雄、弟角蔵役は佐野仁、当時は男子校だったので、茶屋の娘お琴役は私がやることになり女形に扮した。私の父の知人である幇間の家元、桜川梅寿さんが学校に来てくれて、女形の台詞と動作を指導してくれた。学校の行動の舞台は奥行きがなく、舞台装置を飾ると狭いので、卓球台を前において固定させた。幕は両側に材木を固定、滑車を引くと開くようにした。

公演当日、突然停電となり、照明が消えて大慌て…。芝居が中断、それでも観客の生徒たちは騒ぐことなく再開を待ってくれて、最後まで芝居を観てくれた。大道具は角材を組み合わせ、新聞紙を張って泥絵の具で風景や建物を描き、みんな放課後遅くまでかかって作った。予算が少なかったので、江口先生は保護者に寄付をお願いしたそうである。

この年の 9 月、日本学生演劇連盟中等部が発足、芝商も創立メンバーとして参加し、36 校が加盟した。

1947（昭和 22）年 5 月 24 日、お茶の水の明治大学記念講堂で、新憲法実施記念第一回合同研究発表会が行われた。都内 19 校が参加、ゲルハルト・ハウプトマン作「ハンネレの昇天」（一幕二場）とカール・シェーンヘル作「信仰と故郷」（三幕）を上演。芝商から 4 名、私は「信仰と故郷」のザントベンゲル役で、加藤登が裁判所の初期役で出演、長坂と小島万平はスタッフとして参加した。芝商の教室が稽古場として開放され、3 か月間男子校と女子校の生徒が一緒になって舞台を創造していくことは、戦前戦後を通じて初めてのことであり、画期的な出来事だった。戦前まで「男女 7 歳にして席を同じうせず」と言われ、小学校で稀に男女一緒のクラスがあったが、中学校になると男子校と女子校に分けて教育されていたから、男女生徒が一緒に芝居をやることは日本始まって以来だったから、好奇と注視の的となった。劇作家若林一郎、作曲家林光、俳優の高橋昌也、名古屋章、伊藤巴子らは新劇界で活躍している。

1948（昭和 23）年には、東京高等学校演劇研究会主催の第二回東京都新制高等学校演劇コンクールに芝商も出場することになった。再び私が女形をやることは避けたかったので、ある有名女子校に共演を申し込むと、すでに有名男子校との共演が決まっていると断られてしまった。すると、米澤栄三先生が共演校を探している女子校があると教えてくれて、都立大崎高女との共演が決まった。米澤先生は東大農学部を卒業し、芝商に教員として赴任したばかりで、私たちの五歳年上だったので、親しみやすく、演劇に詳しいことから心強い存在だった。最初に選んだ戯曲はアメリカの劇作家、バーナード・ショウの「馬泥棒」だったが、アメリカ占領軍のＣＩＥ（民間情報教育局）が著作権の関係で難色を示し、許可が下りなかった。そこでやむなく江口先生が自ら創作劇を書くことになった。江口先生は当時住んでいたところから、2 時間かけて学校に通勤していたので、電車の中で素案を作り、ノートに断片を走り書きして創作したそうである。プログラムには芝商高文芸研究部作」と記されているが、作者は江口先生だ。

題名は「机の上」（一幕三景）、机の上の唯物論書、聖書、赤インク、青インク、計算尺が互いに論戦し、人形があきれて踊り出すという音楽劇風で、当時の世相を風刺したものである。芝商から 19 名、大崎高女から 15 名参加。稽古は芝商と大崎高女で交互にやり、必ず相方の先生が付き添った。制作を担当した橋本高明がＣＩＥに台本をもっていき、担当官の質問に答えて許可を取った。台本の上には、大きな英語の許可印が捺印されていた。演出は私の名前になっているが、実際は江口先生がやり、音楽は大内福三郎先生が作曲、岡本辰次がピアノを弾いた。

10 月 30 日、東洋英和女学院の講堂でコンクールの予選が行われ、私たちは緊張して必死に演じたゆえ激賞され、見事予選を通過した。最有力視されていた私たちとの共演を拒否した有名女子校と男子校との共演は落選した。審査員の文学座の演出家、戌井市郎氏は「最近、これほど面白い芝居は見たことがない」と絶賛してくれて、何よりも高校生らしい創作劇であったことが高く評価された。

11 月 26 日、有楽町の毎日ホールで、演劇コンクール中央発表会が開催された。元プラネタリウムだった円形の建物を劇場に改変したホールだったが、私たちは予選を通過した 6 校と競演、第一位に選ばれ、東京都知事賞を受賞した。舞台装置を大八車に乗せて、浜松町から銀座を通って運び、途中巡査に咎められたりして大変だった。第一位受賞は全く予想もしなかったことなので、みんな本当に喜び合った。人間は何事も誠実に懸命にやれば、必ず報われるということを私は初めて知った。そして江口先生から「思想や宗教に偏らない時代に生きる人間への冷静な洞察力」を学んだ。それは、私の映画監督としての理念の基本にもなっている。「机の上」は江口先生の傑作で、私は当時の台本を今でも大切に保管している。

コンクールでの成果から 1949（昭和 24）年 3 月 26 日午前 10 時半より 20 分間、ＮＨＫの学校放送の時間に芝商と大崎高女が合同でラジオドラマを放送することになった。台本は私が書き、「就職」という題名で、大学進学を夢見ていた高校生が、家庭の事情で進学を断念、友人たちから新たな人生の出発を励まされるという物語である。当時 1,400 円の脚本料が私に支払われた。

以来芝商演劇部は、1 学年下の佐野仁、2 学年下の山本公之らに受け継がれ、暫々コンクール入賞して、演劇が盛んな高校として全国に知られるようになったと聞き、私も大変うれしかった。江口先生は、後年東京都高等学校演劇研究会や全国高等学校演劇協議会の事務局長を務めたそうである。

1987（昭和 62）年 5 月、38 年ぶりで芝商と大崎高女の演劇部出身者が銀座の「大増」に集まり、江口先生を囲み旧交を温めた。その中には、共演が縁で結婚した者もいた。

1995（平成 7）年 2 月 24 日、江口先生が黄泉の国に旅立った。先生は自伝の中で、コンクール当日のことを次のように記していた。「この日を機会に私は思いがけず『高校演劇』に深入りし、20 年近い歳月の喜びも悲しみも、この一筋に生きることになる。今までの目標のあやふやな人生から、確かな目標を目指して動き出す、精神的に深淵から浮かび上がる転機となった日…といえる。翌日、人のいない職員室で、私は意味の分からぬ涙を流した。」